

# 一〇〇号おめでとうございます

東京の民主教育をすすめる  
教育研究会議（東京民研）

『にいがたの教育情報』が100号をむかえたこと、心からおよろこび申し上げます。

季刊ということですが、内容が多岐にわたっており、いつも運動の広さを感じています。

今、子どもたちは、新自由主義教育の名のもとと自・公政権ですすめられた競争と管理、貧困と格差のためにあえいでいます。しかも改悪「教育基本法」の具体化である新指導要領の移行措置も始まり、子どもたちについてその差別と選別の教育が押しつけられています。東京では、30人以下等の少人数学級を全国で唯一実施しないばかりか、国に先駆けて「日の丸・君が代」の押しつけと処分、「主幹」・「主任教諭」制度の導入や「小・中（高）一貫教育」の導入など、子どものすこやかな成長を願う都民の願いを踏みにじる石原「教育改革」がすすめられています。しかし、東京の

教職員は、これらの攻撃をはね返すために、父母や地域の人々、そしてすべての教職員と力を合わせて、今まで積み上げてきた豊富な実践を財産に、民主教育を守り発展させるため教育懇談会や集会などの取り組みを進めています。

これからもすべての子どもたちの笑顔が輝くように、それぞれの地で連携を強め、民主教育のいっそうの前進のためにともに力を合わせていきましょう。

『にいがたの教育情報』がこれからもますます発展されることを心からお祈りしています。

## 各界から

### より広い視野と展望のもとで

岡野 勉

『にいがたの教育情報』が100号を迎えたことは、新潟県の教育現実に即したテーマで、幅広く、かつ、粘り強く活動を展開し、蓄積して来られたことの貴重

な到達点を示していると思います。そのような活動を中心的に担って来られた研究所のスタッフに敬意を表します。私も、非力ながら、教員の多忙化、学習指導要領、教科書の、特に算数についての内容分析、いじめ問題等、学校教育に関する問題の一部について、関わりを持たせて頂きました。変化の激しい社会の中で、教育について必ずしも明るい展望が見えているわけではありませんが、今後も、より広い視野と展望のもとで、新潟県の教育と子どもの姿を見つめ、その将来を切り開く活動の展開を期待しています。

(おかの つとむ・新潟大学教育学部)

さらに続くように

糟谷憲一

『にいがたの教育情報』100号の発行おめでとうございます。ここまで継続できたのも、研究所を創立され、その運営にあたってこられた皆さまのご苦心のたまものです。会員が自発的に資金を出し合って、研

究組織をつくり、定期的に会誌を出して、教育に関わるあらゆる問題を取り上げて自由に議論し、それを通じて新潟の教育をよりよくする活動に貢献する努力を続けてきたことは、全国にも類例が少ないことだと思います。私は新潟大学に勤務していた時代には、にいがた県民教育所の皆さまにはたいへんお世話になりました。東京へ移って15年となり、『にいがたの教育情報』の記事をときどき読むだけの、あまりお役に立てない会員となりました。そういう立場で申し上げるのは恐縮ですが、研究所の皆さまが着実に活動を進められ、『にいがたの教育情報』の発行が150号、200号へと続くようになりますよう、切に願うものです。

(かすや けんいち・一橋大学大学院社会学研究科)

次の100号へ

菊地一郎

この『教育情報』が100号を迎えられたこと、心よりお慶び申し上げます。思い起こすと、「県民教育

研究所」を設立のとき、八木三男氏からいろいろ話があったのですが、私はまだ子供にかりきりで、なにも協力できませんでした。申し訳ない気持ちで今まで過ごしてきました。ただ、一会員として今日まで参加させていただいています。

今まで二十余年間、研究所の八木所長初め、所員の皆さんの奮闘努力は、なみ大抵ではなかつたと思います。経済的に逼迫したなかで、毎回まいかい『教育情報』、『研究所通信』の企画・編集・出版だけでも本当にご苦労さまです。それに加えているいろいろ行事を行つていくことは大変なことです。外で見ているだけでも、そのようすがうかがえます。八木氏が亡くなり、第二世代の皆さんの力量が発揮されるのは、いよいよこれからです。この機関誌が新潟県の民主教育の推進のため、次の四半世紀に向かつてさらに活躍されることを祈ります。

(きくち いちろう・佐渡市)



## 一〇〇号記念

—教育の営みが見える

小林 朗

『にいがたの教育情報』一〇〇号おめでとうとございます。県内の教育に対して、熱い眼さしを持ち続けてこられたことに改めて敬意を表したいと思います。にいがた県民教育研究所は、「組合立」ではなく、市民の視点で活動されていることが全国的にも特筆すべきものです。その結晶が、教育情報になつているといえます。私も数回、拙い文を寄稿させていただきました。記念すべき一〇〇号に美辞麗句だけでなく、若輩ではあります。少しは苦言を述べたいと思います。

今日ほど教育の営みが難しいことはありません。子どもを中心にして、教育をめぐる人々が手を結ぶことが大切になつています。この時に、教師の果たす役割も大きいものです。その教師が、『教育情報』にどれだけかかわっているかが私には常々疑問になつていました。

若い教師が『教育情報』を手に取り、読みたい教育雑誌になつてほしいと思つています。

(こばやし あきら・小須戸中学校)

## 一〇〇号の発行、

# 本当におめでとうございます

田 口 孝

学校は今、根底から揺さぶられています。

まず、このインフルエンザ……。長岡は今、第二波をかぶっています。欠席と早退が止まらず閉鎖措置が二回目という学級も出ています。冬休み中に登校しても、授業時数は不足します。

さらに、今の学校は、新指導要領の移行期で、「教えても、教えても、教え足りない学習内容」なのです。学校は「明日も元気で、子どもはやつてくる」という大前提のもとに成り立っていたことに改めて気づかされました。学校は困り果てています。

また、少し前までは考えられないことが多発します。

書写の後片付けなどは、年々すさまじさを増しています。子どもたちも育ちそびれているようです。背景に家庭の崩壊や虐待が見え隠れし、子どもが安心して生活し成長する基盤が危うくなっています。

一方、教職員も、若手、中堅、ベテランのどの年代も希望と自信をもちにくいのが現実です。

研究所に「学校が元気をとり戻していけるための方向性」を、これからもぜひ探つてほしいと思います。

(たぐち たか・小学校養護教諭)

## 魚沼と子ども研究

土 田 光 男

「教育情報」創刊80号に、「退職八年、何種類かの教育雑誌の購読を全て取り止め、只一つ『教育情報』だけが残った」と書いたのは、つい先だつてのような気がします。そこに吉田三男さんが、「該博な知識を駆使した八木三男さんの諸論文を読むのが楽しみの一

つ」との一文が寄せられていたが、その八木さんも鬼籍に入られて二年近くにもなります。

私事になるが、その八木さんたち研究所のスタッフと「魚沼と子ども研究」をめぐって侃侃諤諤の討議を交わした何年かが、私の「教育情報」とのかかわりの中で、一番充足した、また濃密な時間だったような気がします。

そのことでちよつと書かせていただいたのが98号、そして99号には、斎藤剛さん、小林正弘さんなど歴史教育者協議会新潟県支部の仲間たちが彼等ならではのレポートで誌面を飾っておられる。

そして、過日、研究所から30余名の新理事の名簿が届けられました。「教育情報」100号、バンザイ！おめでとうございます！

(つちだ みつお・南魚沼市)



## 養護学校の挑戦

時 津 聖 子

今年、阿賀野市に県立養護学校の駒林分校が開校しました。長男が現在通っている学校です。

ここはとても画期的な試みを行っている学校で、小学部から高等部までを6・3・3制ではなく4・4・4制に区切っています。子どもの発達段階に合った分け方だと、入学の際にお聞きしました。

養護学校というのは子どもたち一人ひとりに指導計画を作って、先生方の創意工夫によって学習を進めてくれるところが、教育の理想により近い学校だと思えます。加えて、この駒林分校は学校全体としても様々な試みを行って、教育の可能性を追求している印象があり、たくさんの方の見学者も訪れ、注目を浴びている学校です。

この駒林分校での試みが、県内の教育現場全体にも刺激を与えてくれるのではないかと、楽しみながら感じています。

(ときつ せいこ・新発田市)

## 百号に寄せて

長崎 明

本研究所の機関誌は1983年12月に創刊され、この100号で四半世紀余を経た。当初はB5版で「新潟の教育情報」と称していたが、85年12月の第8号からA5版に、87年8月の第15号から「にいがたの教育情報」に変わり、それに伴いページ数が約80頁から約100頁になり、漸く現在の体裁に整った。表紙タイトルの「教育情報」の字が第41号から第45号まで赤・青・緑など様々な色刷りになっていたが、その後は黒一色に限定されている。

編集の特徴としては、毎号「特集」を設け、その時々  
の教育上の問題点を取り上げている。創刊号では「新潟  
県の暴力・非行を考える」、第2号では「新潟県の道徳  
教育を考える」のように、必ず「新潟県の…」を付し得  
るだけの実態調査と研究の成果を基に記事をまとめた  
りている。会員からの会費と寄付だけを収入とする民  
間研究所として、その節度を守り抜いていることが、

徐々にはあるが、会員を増やし続けてきた要諦と言えるのではないか。今後の発展を期待したい。

(ながさき あきら・にいがた県民教育研究所前理事長)

## 一〇〇号の発行に感謝と期待

那須 高明

優れた多くの方々の知性、熱意、実践の蓄積が100号に結実したものと今更ながら驚き、深く敬意を表します。研究所の創設を構想し、その意義の大きさを語って下さった方々、そしてその意志を継承し、より豊かな香りを添えて下さった諸兄弟姉に感謝申し上げます。有難うございました。

若いころから今も私は学ぶことに怠惰でしたから恥ずかしながら教育研究は比重が大きかったと言えませんが、生徒が示す言動に敏感に向き合わず、大事なことを見すごしていたことを後悔することしきりです。

医療、福祉の現場は多忙を極めています。その中でのカンファレンス(協議)のもち方、生かし方の工

夫が重視されています。県民教育研究所は現場のカンファレンスの核となつて、さらにきめ細かな情報交換集約、発信を続けられますようお願いしています。

(なす たかあき・長岡市)  
(編集部) 那須さんは本誌の表紙をデザインされた方です。

## やはり教育が大事です

新田 初美

教室に居られない、落ち着かない、イライラ、無力、不登校など、子どもの心診療科には今日も急ぎの子ども達の相談が絶えません。過剰な刺激の中にあつて慢性的な疲労感の窺える子、自信を無くし自尊心を低めている子、夫々に大人の気づきを求めています。背景には、追いつめられ余裕を失いかけている大人の姿も見え隠れします。

特別支援教育が全面实施となつて三年目、発達障害に対する理解も進み、支援の実際が展開されていく中で明らかになつてくるのは、個性豊かな一人一人を大

事にできにくい普通教育の窮屈な現実であつたりします。

やはり教育が大事です。「にいがたの教育情報」一〇〇号を重ねてこられたにいがた県民教育研究所の先達の偉業に敬意を表しますとともに、これからも、その時その時の子ども達に学びながら、子ども達の行く路を照らして下さいますこと期待申し上げます。

(にった はつみ・医師)

## 「学閥」研究の発展的継続を

野村 紀子

新潟の教育の現状と課題を常に市民の側に引き寄せてみる視点を大切にしてこられたことは、教育とは何かを考える上で大切なことだと思つています。私が最も注目し、そして今後の研究の発展を期待するのは「学閥研究」です。

全国で「学閥」が教育に影響を与えている県は新潟・愛知・そして長野ですが、この「学閥」とはどのような

なもので、どのような形で教育に影響を及ぼしているのかを示したことは画期的であり、他県にもこの研究成果が広がりました。そこから新潟の「学閥」の特徴が明らかになりました。しかし、他県が研究分析のみならず、実際の研究を生かし、課題を克服すべく、実践化しているのに対し、新潟では研究の成果は現場の教育運動課題と必ずしも結びついていないのが残念に思われます。

「学閥」が温存されるのはそれを補完する環境があるからであり、一方でそれによつて人権・教育権を奪われている子どもたちの現状を自覚すれば、方向性は見えてくると思います。

教育学は総合科学であり、その研究は実践に裏付けられなければならないと思います。「学閥研究」をはじめ、一つ一つの研究成果が実証され、発展できる方向性が示されることを期待しています。

(のむら のりこ・中学校教員)



## 印象に残る第五号

三ツ井 富士夫

一九八三年一二月の「新潟の教育情報」創刊号から四号までは設立準備会の時のものです。一九八四年一月研究所設立後の最初の教育情報が第五号です。

「特集 いま新潟県の教師に期待するもの」は、印象深い。特に大田堯先生の教育論に大いに感銘しました。「めあてをもつて生きる」若者像は、当時、中学、高校での「荒れ」が深刻化する中で、私には、深く考えさせられた提起でした。若者たちが内省化し沈滞化している現在の状況にもフィットする言葉に感じます。この講演をまとめた論文が、その後、私が多くのお客様の書物を読んでいく契機となりました。教育実践にも大きな刺激となりました。実践しつつ理論を学ぶことの大切さを『にいがたの教育情報』から学んだように思います。

(みつい ふじお・高校非常勤講師)



## この十年と子どもたち

八木 絹

『にいがたの教育情報』一〇〇号おめでとうございます。父がこの号を見ることができたら、どんなに喜んでほしいか。

私はいま東京で高三と中二の息子を育てておりますが、この子どもたちの学校生活は、ちょうど石原都政の十年と重なります。わが子やその学校を見ていても、この十年で東京の教育がものすごく変えられ、先生も子どもも閉塞感のなかで暮らしているのがよくわかります。高三の子の校長先生（土肥前三鷹高校長）は、いま職員会議での挙手・採決禁止に反対して裁判闘争までたたかっていますし、中二の子は小学校時代、不登校を経験しました。

教育への圧迫は何でも東京で始まり、地方に波及していくのが最近の習いです。東京の教育がどう変化し、それに市民はどう立ち向かっているのか、そうした情報を新潟のみなさんに知っていた、だくお手伝いができる

たらと望んでおります。父がお世話になった研究所のますますの発展を祈念し、恩返しのため協力させていただきます。と思っています。

（やぎ きぬ・東京都在住）

## 「一〇〇号」という時間

八 鍬 友 広

本誌が百号を迎えるという。季刊であるから、単純に計算して二五年、四半世紀である。この頃の学生は、これを「よんはんせいき」と読んで、自ら意味不明に陥るのだが。ともあれ四半世紀という時間が、本誌の上を過ぎていったわけである。この間、本誌は果たしてどれぐらい時代の予兆をつかまえることができたのだろうか。

先日、新潟大学で、ノーベル物理学賞受賞者の益川敏英氏の講演があった。その中で感心したことのひとつに、とにかく予測をすることが重要だという話があった。どうせ人間のちっぽけな頭で考えるのだから、間

違つに決まつている。しかしそれでいいのだ。と。予測値と現実との距離を測り直して、さらなる予測をたてることこそが大切なのだというのである。あたりまえのことだが、案外忘れがちなことでもある。

かつて、「大きな物語」としてあつた種々の予測は、その後しだいに顧みられなくなつた。ひとつ、間違つてもよいから、大胆な予測を論じあう、そんな場を本誌が提供することはできないだろうか。

(やくわ ともひろ・新潟大学)

長寿万歳！

幅広い問題意識に脱帽

吉田 三男

テレビで「百才バンザイ」という番組があるが、まさに「教育情報」もそのことにまず敬意を表したいと思います。

なつかしいこと。99号の巻頭論文、佐藤一子先生は、

彼女が東大の院生の頃、「公害と教育研究会」の事務局で、集会のまとめなどで頭の良さを発揮しておられました。東大教授を定年退職：私も年をとつたわけです。

「嘉村正規さんに聞く」、こちらは私が師範学校予科一年の時の本科一年生。最後は中学校長会長、常に仰ぎ見る大先輩です。戦後の教育民主化、特に新制中学校発足と社会科学教師としてのスタート、「自由に意気揚々と授業にとりくむ。続編が待たれます。教育反動化の中で教育界のトップはどんなことを考えておられたか、是非お聞きしたいと思います。」

(よしだ みつお・新潟市)

(五十音順)

